

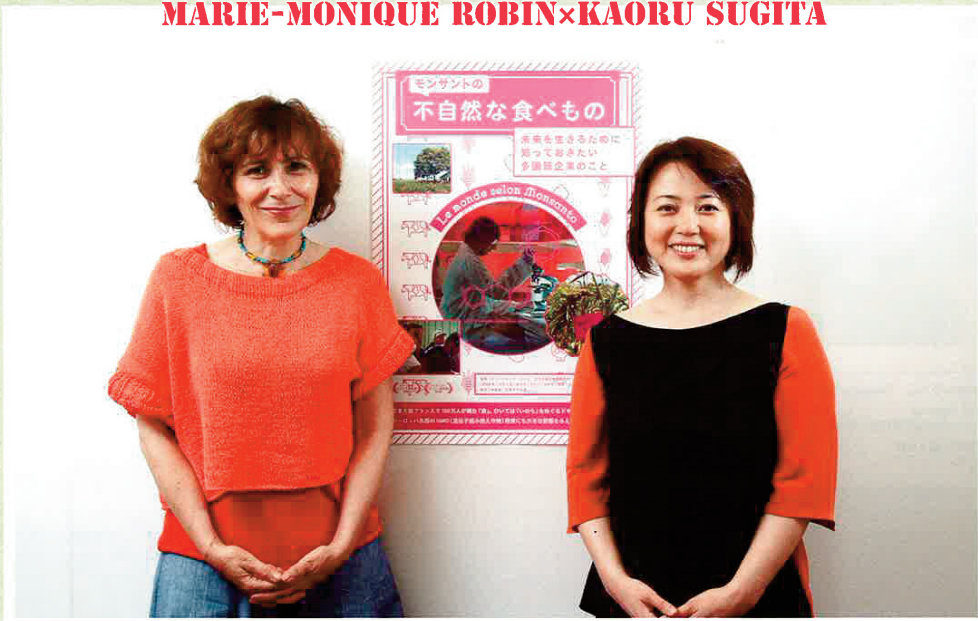


杉田かおる×マリー＝モニク・ロバン監督 「モンサントの不自然な食べもの」 が描く真実

新刊「この私が変われた理由」の中で、昨年はじめた自然農についての素晴らしい記事を書いた女優の杉田かおるさんと映画「モンサントの不自然な食べもの」(9月1日公開)を撮ったマリー＝モニク・ロバン監督の緊急対談が実現!

写真/八幡宏 文・構成/大崎暢平

MARIE-MONIQUE ROBIN×KAORU SUGITA



モンサントが支配する種の世界

杉田かおる(以下、杉田)「モンサントの不自然な食べもの」は本当に素晴らしい作品でした。専門的な内容もテンガよく見せられ、モンサント社の手口を明らかにしていく内容に引き込まれていきました。まだまだ日本では「遺伝子組み換え(GMO)」と「品種改良」の違いについても知らない人が多いと思いますので、多くの人に観ていただきたい映画です。
マリー＝モニク・ロバン監督(以下、マリー) そうなんです、その二つはまったく異なるものなのに、モンサントは「実質的平等性」という言葉を巧みに使い、「遺伝子組み換えは品種改良と似たようなもので、安全性が証明されているので大丈夫です」というプロパガンダを行っています。日本に限らず、世界中の人たちがそれをずっと信じてしまっていたのです。だから

こそ、この映画が公開された時はインパクトがありました。私たちの国(フランス)をはじめ、ドイツやカナダ、アルゼンチンといった国々の政治家たちの目を覚まさせることになりました。杉田 日本で起こった原発事故の例を見ても、専門的知識を備えたスペシャリストの方々がその力を発揮できなかった経緯がありました。この遺伝子組み換え問題についても、同様のことが起こらないように願うしかありません。マリー フランスの状況をお話すると、私はこの映画を携えて小さな小さな村にも回っていききました。そこで出会った地方の代議士には、政治信念を持ち、オープンマインドの持ち主が多かったです。日本でもそういった方々にまず知っていただくことからはじめればいいのかも知れません。杉田 私も有機農業について勉強する中で、種のことでも知りたいと思うようになり、講習会に

参加したことがあるんです。その時は複雑な問題が絡んでいるんだと感じたのですが、映画を観てそれがはっきりわかりました。マリー そう、モンサントは種の業界を牛耳っています。遺伝子組み換えの種は特許化されているのです。それがどういふことかと言えば、その種で作った作物から採れた種を次の年に使うことは許されていないのです。モンサントが雇った「遺伝子警察」がアメリカの農家をパトロールして、それを行った者は莫大な金額の訴訟を起こされてしまいます。非常に恐ろしい事態が起こっているだけでなく、このままでは生物多様性が失われ、すべてが画一化されてしまいます。モンサントは世界の種子を制覇する覇王になるために、遺伝子組み換え種子を生み出したのです。種子を支配することは食糧すべてを支配することに等しいですから。

まずは知るところから はじめよう

杉田 本当に恐ろしい話ですね……。そういった種から作られたものを子どもに食べ続けてきた影響が、いまの若者たちにすでに出てきてしまっているのではないかと危惧しています。マリー そうなんです。私が「モンサントの不自然な食べもの」の次に作った「日常の毒(日本未公開)」は、50人の科学者にインタビューを行い、どういふ風に化学物質が人間に広がっていくのかを伝える作品でした。そこでは、人



マリー＝モニク・ロバン

ジャーナリスト、ドキュメンタリー作家、ジャーナリズムを学んだ後、リポーターとして南米に渡り、コロンビア、グアテマラなどを取材。その後、ドキュメンタリー作家として多くの作品を発表。1995年、国際賞をテーマにした『Violence d'yeux(眼珠の泥棒たち)』でアルベール・ロント賞受賞。2008年、本作『イチャエル・カソン賞(ノルウェー)、ドット環境メディア賞ほか数々の賞に輝く。

工甘味料に使用されるアスファルタムやプラスチック容器に含まれるビスフェノールAやフタラートと呼ばれる合成分子の危険性を指摘しているんです。この映画は確かにモンサントに焦点を当てていますが、彼らだけが例外ではないのです。色んな企業が様々なことを隠しているということを知ってもらいたいですね。杉田 そちらの作品も一刻も早く日本で上映されることを願っています! この映画が制作された2008年という年は、日本では産地偽装や事故米を食用に転売するなど食品偽装問題が多発していました。「食品偽装」という言葉が流行語に選ばれたくらいなんです。その頃から、国民の中で食品に対する不信感が徐々に膨らんでいったわけですが、昨年の原発事故によって放射性物質の問題が取りざたされ、決定打となりました。

マリー 日本の状況と同様に語るわけにはいきませんが、ヨーロッパでも90年代後半に起こった狂牛病の問題はととてもよく似ていると思います。政府に対する不信感が高まったのはもちろん、ヨーロッパで有機農業に携わる農家をサポートしようというきっかけにもなりました。見方を変えれば、このようなさながら電気ショックのような問題は誤りを正すチャンスでもあるわけです。未来の子も私たちのために私たちが生きる社会を構築していかないとはいけませんから。自分たちが食べるものに何が入っているのかを自分でコントロールするためには、オーガニックの農家を支えていかなくては行けないのです。彼らは地産地消を行い、トレーサビリティがしっかりしている遺伝子組み換えの種を輸入する必要がありませんから。工業化された農業から脱したいといけません!

杉田 確かに監督の言うとおりで。私自身もいま自然農で野菜を作っているのですが、この農法で有名な川口由一さんという方の言葉に「土というものは色んな生命体の亡きからの層である」というものがあります。さらに、「その土地のものは、草であって採ったものはそこに還さないといけな」という言葉からは、生命の循環の尊さを感じますね。そこから持ち出



杉田かおる

女優。7歳のとき「ババと呼ばないで」でテレビデビュー。以来、現在まで女優、タレントとして芸能界で活躍。著書に「杉田かおるのオーガニックライフ」「勝者美人のつくいかた」「いとうきよ美さんと共著」。最新刊「この私が変われた理由(アスコム)がある。ブログ「オーガニックな気分」 <http://ameblo.jp/sugitakaoru/>

したりしてしまうことは、生態系を壊してしまいますから。そういう点から考えても、遺伝子組み換えは聖域を犯してしまっただと思ってしまえぬ。

マリー 戦後以降、拡大してきた農業ビジネスモデルの究極の形が遺伝子組み換えであると言えるでしょう。そういうモデルは跳ね返さないとはいけません。だからこそ、農家の方々が自分たちで自足できるようにはなくては。

杉田 農家の方々がそういう種を使わなくてもいいようにしないといけなはもちろん、消費者である私たちが、もっともこの問題について知らなくては行けないと思いますね。

これから 未来を生きるために 知っておきたい多国籍企業のこと モンサントの不自然な食べもの

ヨーロッパ各国のGMO政策にも大きな影響を与えた話題がついに日本公開!食糧市場を支配する脅威の多国籍企業「モンサント」の実態に迫る。遺伝子組み換え作物の世界シェア90%を誇り、金融不況の中、成長を続ける多国籍企業「モンサント社」。クリーンなイメージを打ち出す裏の姿をカメラは追う。枯葉剤、農薬、遺伝子組み換えの危険性を隠蔽し、自然界の遺伝的多様性や食の安全、農業に携わる人々の暮らしを意に介さないモンサント社の世界戦略。農業大国フランスで約150万人が観た本作は、「食」、ひいては「いのち」を支配し利益を追求する現在の経済システムについて、強い疑問を投げかけています。そして作中に登場する各国の深刻な状況は、TPP締結後の日本の姿かもしれません。



監督:マリー＝モニク・ロバン
カナダ国立映画制作所・アルテ
フランス共同製作
(2008年/フランス、カナ
ダ、ドイツ/108分/原題:Le
monde selon Monsanto)
監録:宣伝:アアプリンク
9月1日より、渋谷アアプリンク
ほか全国順次公開